

くろぐみだより

あさひこ tweet…

(劇の際、舞台袖で待っているときの声が大い！と指摘された年長児たちが、自由遊びの時間、園庭で)
「よし、ソデの練習のために、そーっと静かに鬼ごっこやろうぜ！ 忍者鬼ごっこな！」
(ほんと、いろんなこと考えつくよなあ…)

第7号 平成25年 2月 7日

さあ、生活発表会ですね！今回のくろぐみだよりは、改めて生活発表会のことについて書きたいと思います。全学年対象に書くので、いささか抽象的ですが…発表会本番を、保護者の皆様はとて楽しみにしてみえろと思ひますが、その発表会の「通な見方」や、「発表会に至るまでの過程」は、ひょっとして、本番だけを見てわからない、想像できないかもしれない、と、お節介ながら思いましたので、前日の今、急にこうやってくろぐみだよりを書き始めました。

突然のお便りになりましたが、お時間があれば、ぜひお読みくださいね。

生活発表会とは？ (副園長)

「生活発表会」って、不思議な名前だと思いませんか？

僕は新任のとき、変なの、と思ひました。なんで劇の発表なのに、「生活発表会」なんて名前なんだ？と。

「お遊戯会」みたいに、幼稚園文化の中で定着し形骸化した、ただの専門用語的なモノかな、と思ひていました。

しかし、今ではやっとなし、その意味がわかってきました。

園長は、職員会議で言ひます。

「生活発表会を、劇の出来で評価しようとは全く思わない。

そういうところを飾り立て、格好つける必要は全くない。

保育として間違っていない、ふさわしいものであれば、それでいい」

そう、あさひこ幼稚園の生活発表会は、本当に、「生活」の発表会なのです。

発表会でなにをやるか、と問われ、ジャンルで答えるなら「劇遊び」「表現遊び」をやる、ということになります。しかし、みなさんに発表したいことの本質は「劇」ではなく、「生活」なのです。

1学期、今の学年、今のクラスになった日から、まさにその学年の集大成と言える今、3学期までの、毎日、毎日の生活。

ずーとなしそこで過ごし、少しずつ確実に積み重ねてきた、かけがえのない毎日。それらの経験を経て、子どもは、少しずつ、また時に急激に、育ってきました。

生活の節目として、いろいろな行事もありました。

しかし、行事単体、その一日だけか子どもを成長させるなんて、そんなはずはありません。行事には、その節目に向かう、毎日の経験がありました。

生活発表会は、そういう、今までの、クラスでの…いや、それは実は「入園して以来の幼稚園生活」での、かもしれません…毎日の生活での積み重ねた経験や思い、それによって子どもがいかに育ったか。その育ちを、「表現遊び」という形にのせて、発表するものなのです。

そう、発表会のねらいは、「生活と、そこでの育ちの発表」です。

その本質は、どの学年・どの子どもにとっても、変わらないことです。

そして、だからこそ発表会での子どもひとりひとりの姿は、みんな同じではない、それがどんな形で表れるにしても、それぞれにとっての育ちの姿なのです。

だから、あさひこ幼稚園では、発表会に向けて、「発表会があるから」、劇を「やらせる」、ということはありません。

形だけ高等な劇をやらせようと思えば、幼児は、じゅうぶん、「調教」できます。個人的には、他園の公開保育などで、そういう幼児をたくさん見てきました。保護者や先生、大人を満足させるための、高等な芸を調教された子どもたちを。

でも、そんなことは全く「育ちの姿」ではないと思ひています。だから、あさひこでは、みんなで気持ちを向け、自分たちで「やりたい！」という気持ちをもって劇に取り組んでいきます。どの学年も、本番、どのような形になったとしても、それは、大人の都合でやらせた劇では、決してありません。

みんなであらう

また、生活発表会は、「ひとりひとりの育ちの姿の発表」でもあり、同時に、「クラスという集団の育ちの姿の発表」でもあります。

発表会の中で、劇の内容とは関係なく、走り回ったり、ふざけたり、友達とけんかしたり、チンチンを出したりする子がいるかもしれません。恥ずかしくて、物陰に隠れている子がいるかもしれません。また、劇の物語に沿って、きちんとマジメに座って、歌って、役柄を演じる子がいるかもしれません。

では、ふざける子どもたちは「できない子」で、マジメな子は「できる子」なのでしょうか？

そのように評価するのは、実は、大人の狭量な価値基準なのです。

ふざけている子は、ひょっとしたら、今まで大人のいうことを聞いて従っていただけの世界から、やっとなし自我を発揮し始めたのかもしれない。

それとも、今までは自分のことだけで頭がいっぱいだったのが、周りが見えるようになって、「照れ」を感じるようになった、その表れなのかもしれません。

幼児は、まさに今、「人生で初めて！」な経験を、毎日のようにいっぱい重ねて、さまざまな思いを感じ、それをさまざまな形で表している真っ最中なのです。

すでにそういった経験を一通りしてきた大人の行動と、単純に比較して考え、評価してはいけません。

そして、子どもは、ひとりではじゅうぶん大きくなれません。

上に書いたように、子どもは、それぞれ色々な育ちの姿、個性を持っています。男の子。女の子。体の大きい子。小さい子。おとなしい子。激しい子。体の不自由な子。特別な支援を必要とする子。病気をしている子。

誰もが、それぞれ全員の子が、みんな異なる個性を持っています。そして、それらの個性は、どれが「いい」で、どれが「悪い」というものではなく、絶対にありません。子どもたちは、みんな違います。異なる個性を持っています。そして、個性が異なるからこそ、子どもたちはお互いに、育ちあっているのです。

いや、子どもに限定せずとも、人間は、みなそうなのでしょう。

異なる個性を持ったクラスメイトとの生活。そんな中で、子どもたちはたくさんの思いを感じてきました。それは、うれしい、楽しい、幸せ、というものだけではなく、悲しい、苦しい、痛い、そういった経験もありました。「嫌だな」「苦手だな」と、人間関係の中で葛藤することもあったことなのでしょう。

みんなそれぞれ、経験も少なく、未熟な幼児です。自分勝手さは、もちろん、それぞれの年齢なりに、あります。でも、そんな子ども達が、少なくとも大人の都合で整理され操作された生活を送るのではなく、ありのままの自分を出して、本音でつきあう。嫌な思いもする。痛みもある。そんな中で、先生の手を借りながら、他者の個性を受け入れること…受け入れながら自分を発揮すること…「お互いの思いをどうしたらいいか」を考えられること…そんな経験を重ねていくうちに、「友達(他者)っていいな」「一緒にいたい、一緒に楽しい！」

と、表面だけでなく、心から本音で思える気持ちが育ってくるのです。自分とは異なる個性を持った他者と、一緒に過ごしたいと思ひ、それを楽しいと感じ、「気持ちが通じた」ということの喜びを感じていくのです。そして、そういった経験が、その集団を、さらに豊かで、つながりの深い集団にしていくのです。

これは、幼稚園の、色々な個性を持った子どもたち、全員にあてはまることです。それらは、「今までの幼稚園生活、そしてその学年のクラスという集団の生活の中で、育ったこと」であり、「そうやって育ちあった集団」なのです。

生活発表会は、ひとりひとりの子どもが、「生活の中で育ってきた自分の姿」を、そして「ひとりひとり異なる個性の中だからこそ、育ちあってきた集団の姿」を、表現遊びという活動を通して発表する場です。

劇である、ということは、その表面上の形式でしかありません。

だから、発表会本番、みなさんに注目して、感じて欲しいのは、劇としての完成度や、当日の動きだけではなく、今までに書いたような、ひとりひとりの、また、みんなの、「今までの育ち」です。この発表会には、ひとりひとりの、そしてみんなの、「育ち」が、「今」が、たくさん詰まっています。

どうか、そういった視点で、一度しかない、本番当日の子どもたちの「今」の姿を、本当の意味で…心ゆくまで感じていただければ、と思ひています。